

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(共同制作支援事業)
成果報告書

事業（公演）名	グランドオペラ共同制作 プッチーニ作曲 オペラ 『トゥーランドット』 全3幕（イタリア語上演／日本語及び英語字幕付）
代表団体名	公益財団法人神奈川芸術文化財団
劇場・音楽堂等の名	神奈川県立県民ホール、iichiko 総合文化センター、やまぎん県民ホール
実演芸術団体等の名	東京二期会、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団
内 定 額	66,133 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業の概要

趣旨・目的、ニーズ等

本事業代表団体である神奈川県民ホールはこれまで、札幌文化芸術劇場 hitaru、愛知県芸術劇場、兵庫県立芸術文化センター、iichiko 総合文化センター、びわ湖ホール、東京二期会をはじめとした全国の劇場・芸術団体と共同制作を行い、単独事業では成し得ない大規模かつ国際的水準のオペラを創造発信して参りました。文化庁からの支援で実現した実績数は、全国で12演目47公演に及び、計71,445人の観客にオペラ鑑賞機会を提供し（平成19年度～令和2年度までの実績）、その結果、首都圏のみならず、日本各地域においても、鑑賞者の拡大、芸術文化の振興を図ることができました。

令和2年度は、これらの経験や培われたネットワークを活用するとともに、日本芸術文化振興会 PDPO による事後評価や助言指導の結果を踏まえ、国内でオペラの振興が期待されてきた東北地域において、やまぎん県民ホール（令和2年5月開館、山形市）のオープニング事業となる上演を実現しました。

具体的な共同制作の手法としては、3劇場、1オペラ団体、2オーケストラによる新たな共同制作チームを組織し、スペクタクルなオペラ『トゥーランドット』を新演出上演し、大劇場ならではのスケールの大きな国際的水準の舞台芸術を、山形・東北のほか、神奈川・首都圏、大分・九州という各地の劇場にてオペラ文化の普及・拡大を図ることを目的としました。

以上のような趣旨・目的のもと、今回はG・ブッチーニの最後のオペラであり、圧倒的な人気を誇る名作『トゥーランドット』を、大島早紀子の既成概念を打ち破る空間感覚溢れる創造力で新演出し、キャスト、スタッフとともに新たなプロダクションを制作しました。

音楽面は、近年オペラ指揮者としてめざましい活躍を見せる佐藤正浩と、ヨーロッパ各地の歌劇場で25年間、通算1,000回以上の公演を指揮し、山形交響楽団常任指揮者として活躍する阪哲朗を指揮に迎え、各地域を拠点に活動するオーケストラ（神奈川フィルハーモニー管弦楽団、山形交響楽団）が演奏しました。出演歌手は、国籍や所属する団体の枠組みを越えた視点から、世界の第一線で活躍する日本人歌手を中心に、国内外で活躍するソリストを集め、総合芸術であるグランドオペラの醍醐味を伝える最上質な舞台の創造を目指しました。

3つの地域、全4回のオペラ公演を東北から九州まで連続して実施することは、稽古期間、道具、衣裳等の共有、道具製作、運搬費等の経費の節減につながり、規模的にも経費的（旅費含む）にも1劇場単独では実現が困難な大規模なオペラ制作が可能となりました。このことは、演奏家・実演家としては活動機会の増加、能力の鍛錬につながり、また劇場、芸術団体、クリエイター、スタッフ等としても相互の交流も生まれ、制作ノウハウの共有、向上も期待できるものです。劇場、芸術団体が深く協働することは、拠点施設の機能強化を促進し、また、実演芸術鑑賞の地域間格差の解消にも寄与することであり、「劇場・音楽堂等の活性化に関する法律」の趣旨にも貢献できたと考えます。さらに総合芸術であるオペラを各地域が主体的に制作上演することにより、地域社会の創造性を活性化するとともに、文化芸術基本法が掲げる“文化芸術振興のみに留まらない、観光やまちづくり等、新たな価値の創出”にもつながりました。

“劇場でオペラを観る”という高水準の舞台芸術に触れる経験は、観客と出演者や舞台制作者達との深い感動の共有に加え、オペラを通して世界の文化を知り、感性を高め、真に豊かな心を育む効果をもたらします。文化庁による共同制作支援の助成を得ることで、これらの目的を実現することができ、また、日本のオペラ鑑賞者の増大、東京オリンピック・パラリンピック文化プログラムの充実にも貢献するなど、日本の実演芸術の発展に多角的に寄与できたと考えます。

実施日時・実施会場（所在地）・実施回数

2020年10月17日(土)～18日(日) [2回] 神奈川県民ホール 大ホール

2020年10月24日(土) [1回] iichiko 総合文化センター iichiko グランシアタ

2020年10月31日(土) [1回] やまぎん県民ホール（山形県総合文化芸術館） 大ホール

演目・曲目、幕構成、主な出演者、主なスタッフ、あらすじ等

【演目】 プッチーニ作曲 オペラ 『トゥーランドット』 全3幕（イタリア語上演／日本語及び英語字幕付）

【あらすじ】

時は伝説の時代、舞台は中国の北京。

皇帝アルトゥムの美しく冷酷な娘トゥーランドットにタタールの前国王ティムールの息子カラフが、その美しさの虜となる。カラフは3つの謎を解き明かせば彼女が自分のものになると知り、謎に挑戦する。見事に3つの謎を解いたカラフに、トゥーランドットは動揺し彼の妻となることを拒む。そこでカラフは「夜明けまでに私の名を明らかにできたら、命を捧げよう」と逆に謎を出す。トゥーランドットは「夜明けまでにあの見知らぬ者の名がわかるまで北京では誰も寝てはならぬ」と命令を下し、群衆は血眼になって調べ始める。ティムールとリュウ（ティムールに仕える召使いの娘）が捕われ、カラフの名を明かさせようとトゥーランドットに強いられるが、カラフに思いを寄せるリュウはその秘密を守ろうと自らの命を絶つ。群衆が去った後、カラフはトゥーランドットに愛を語り、口づけをする。心を開いたトゥーランドットは、カラフの名を「愛」であると人々に告げ、二人は結ばれる。

【指揮】 佐藤正浩（神奈川公演・大分公演）／阪 哲朗（山形公演）

【演出・振付】 大島早紀子

【装置】 二村周作 【衣裳】 朝月真次郎 【照明】 沢田祐二 【合唱指揮】 佐藤宏 【振付助手】 白河直子

【演出助手】 菊池裕美子／根岸幸 【舞台監督】 八木清市

【管弦楽】 神奈川フィルハーモニー管弦楽団（神奈川公演・大分公演）／山形交響楽団（山形公演）

【バンド】 大分県立芸術文化短期大学音楽科（大分公演）

【出演】 10月17日・24日／10月18日・31日

トゥーランドット姫：田崎尚美／岡田昌子 皇帝アルトゥム：牧川修一／大野徹也 ティムール：ジョン ハオ／デニス・ビシュニャ

王子カラフ：福井敬（10/31も）／芹澤佳通（10/18のみ） リュウ：大村博美／砂川涼子 大臣ピン：萩原潤／大川博 大臣パン：児玉和弘／大川信之 大臣ポン：菅野敦／糸賀修平 役人：小林啓倫／井上雅人

メインダンサー：白河直子 ダンサー：斉木香里／木戸紫乃／野村真弓／坂井美乃里 ダンス：H・アール・カオス

合唱：二期会合唱団

児童合唱：赤い靴ジュニアコーラス（神奈川公演）／大分大学教育学部附属小学校コーラス部（大分公演）／山辺町立山辺中学校音楽部／山形県立山形西高等学校合唱団（山形公演）

事業（公演）の特徴、鑑賞者利用者拡大のための工夫点又は戦略等

【共同制作の拡がり】

令和2年度は神奈川、大分に加えて山形を迎え新たな共同制作公演に取り組みました。特に令和2年にグランドオープンした山形は東北随一の規模を誇る劇場として立地し、本公演はオープニング記念事業の一環として上演されました。日本のオペラ史に新たな歴史を刻む話題性の高い公演となり、山形はじめ東北の地での新たなオペラ観客層の拡大に貢献しました。『トゥーランドット』のようにスケールが大きく、経費もかかる本格的なオペラを新演出上演するためには、複数の劇場、芸術団体の力やノウハウの結集を要し、共同制作、連携することが必要です。結果的に1館単独では成し得ないグランドオペラ公演の創造発信を実現させました。また、新型コロナウイルス感染症対策として、舞台装置や演出上の工夫から、稽古場の換気対策、動線の切り分け、飛沫実験や感染症専門医師を呼んでの助言指導、出演者全員の体調確認と事前PCR検査等を実施。単独館ではできない様々な対策を講じることができたことも共同制作のメリットと考えます。

【国際的水準の舞台の創造、国際交流】

オペラ『トゥーランドット』は出演者数、舞台等、すべてにおいてスケールが大きく、それゆえに経費もかかる大がかりな演目ですが、共同制作とし経費も分担することで、単独では成し得ない大規模かつ上質なオペラ公演の創造発信となりました。例年は海外から第一人者の指揮者を迎えるなど、出演者・スタッフらの芸術的な国際交流も本事業の特徴でしたが、新型コロナウイルスの影響でその面の規模は縮小しました。他方では、国内を中心に活躍する新たな才能の発見や登用という成果もありました。

【若手歌手人材育成】

若手歌手をアンダースタディとして公募オーディションで採用し、プロの現場で実践的な学びを行うことができる「オペラ歌手育成プログラム」を実施しました。またその成果を発表する場（コンサート等）を関連企画として実施するなど、劇場ならではの取り組みをしました。

【劇場人材育成】

参加劇場・芸術団体間での人材交流、研修、派遣、オンライン会議等を通じて公演制作者のスキルアップも図りました。他方、劇場等で働く希望を持つ学生や若者を対象にした公演制作インターンの受け入れを実施する予定でしたが、新型コロナウイルス感染防止のためインターン受け入れは中止となりました。

【関連企画等での地域への波及効果】

オペラの裾野を広げるため、知名度の高い講師を起用した入門講座やプレレクチャー、地域の劇場・音楽堂等、団体との連携による初心者向けミニオペラ上演やプレコンサート実施、歌手・スタッフ等によるプレイベント開催等、新型コロナウイルスの影響で一部中止はありましたが、関連企画を充実させました。学校団体鑑賞、学生席、25歳以下対象学生チケットや低価格帯の座席を設けるなど、若年層の来場を促しました。若者や初心者からオペラ愛好者まで、幅広い層に対して、公演への興味を喚起させ、理解を深める取り組みを行うとともに、各地域を拠点とするオーケストラあるいはバンドの起用、合唱団員の公募、地元で活動する児童合唱の起用を行う等、地域の人々がオペラに参加する機会を提供しました。継続して共同制作の取り組みを実施することで、地域への芸術文化振興及び活性化の波及効果につなげました。

共同制作を行う劇場・音楽堂等、実演芸術団体

神奈川県立県民ホール（公益財団法人神奈川芸術文化財団）／iichiko 総合文化センター（公益財団法人大分県芸術文化スポーツ振興財団）／やまぎん県民ホール（山形県総合文化芸術館 指定管理者みんぐるやまがた）／公益財団法人東京二期会／公益財団法人神奈川フィルハーモニー管弦楽団／山形交響楽団（公益社団法人山形交響楽協会）

共催者・協賛者・後援者・関係機関

後援：イタリア大使館（全公演）、山形県（山形公演）

協力：神奈川県公立文化施設協議会、横浜市神奈川区（神奈川公演）、大分県立芸術文化短期大学（大分公演）

共催：山形県総合文化芸術館オープニング事業等実行委員会（山形公演）

（２）事業の目標値、実績値

実施会場	実施日程	入場者・参加者数	
		目標値	
神奈川県民ホール	2020年10月17日(土)～18日(日) (2回)	目標値	2,451
		実績値	1,840※
iichiko 総合文化センター	2020年10月24日(土)	目標値	1,184
		実績値	832※
やまぎん県民ホール	2020年10月31日(土)	目標値	1,161
		実績値	869※

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
共同制作の意図や役割分担など事業が適切に組み立てられていた（と認められる）か。
<p>1. 本事業の制作・実施にあたっては、各地域で創造活動を続ける拠点劇場と日本を代表する芸術団体が手を組むことにより、下記が実現することを目的としました。</p> <p>① 世界で活躍する日本人キャストのほか、各界第一人者のクリエイターが集まり、世界水準の上質なオペラを創造発信すること。</p> <p>② その演目を共同制作として実施することで、首都圏だけではなく全国複数箇所で開催し、オペラ鑑賞の全国的な広がりを実現すること。また、共同制作による各劇場や芸術団体の制作能力の向上も実現すること。</p> <p>2. 当初の目的に加え、コロナ禍のもとでも安全にグランドオペラの公演を実施するという目的が加わりました。各主催団体が所定の役割分担の下にそれぞれ積極的に工夫して徹底した感染症対策に取り組み、全公演の上演が安全に実施できました。</p> <p>3. 目的を実現できた要因として、制作・広報面のプロセスにおいて、各劇場と芸術団体が持つ経験、専門知識、ノウハウを開示・共有し、事前に定めた適切な役割分担に従って作業をすることで、効率的進行ができたことが挙げられます。</p> <p>4. コロナ禍のもとでも一連のプロセスにおいて、定期的なオンライン会議を行うことで、制作意図や進捗状況を適宜共有することができました。またコロナ対策としてのホールの舞台や会場・楽屋を使用した実験結果や、注意点、工夫なども共有することができ、主催団体相互の協力体制により円滑に制作作業が進みました。上記を踏まえ、今回の共同制作事業は、劇場・音楽堂等機能強化推進事業「共同制作支援事業」の先例的な「モデルケース」の一つになったと考えます。</p>
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか
<p>助成により下記の通り実現できました。</p> <p>○ 文化的意義</p> <p>日本の芸術水準向上、オペラ界発展に大きく貢献できたと下記の通り評価します。</p> <p>① プッチーニの傑作『トゥーランドット』を現代ダンスを加えた壮大な空間構成で見せる新演出で上演し、既存の手法を超えたオペラ上演の可能性のあり方を創造発信することができた。</p> <p>② コロナ禍で日本在住者への一部変更などが生じたが、国内外第一線で活躍する指揮者、演出家、ソリスト、ダンサーなどが集結し上演することができた。</p> <p>③ 首都圏集中ではなく東北から九州まで全国3劇場で上演することで、各地域にオペラ鑑賞の機会を提供できた。また各地域の地元の芸術団体や児童合唱等を起用することで参加機会の提供と育成にも繋がられた。</p> <p>○ 社会的意義</p> <p>文化芸術振興に加えて、社会への多様な関わりの実現もミッションの一つと考え、下記の取り組みを行いました。</p> <p>① 共生社会・国際化</p> <p>より多くの多様な人々がオペラ上演を楽しめる環境整備として、字幕・当日プログラム・場内アナウンス・広報物の日英2ヶ国語表記、車椅子席・バリアフリー導線・専属的な案内係の確保等を実施した。</p> <p>② 地域活性化</p> <p>地元の児童合唱団等の芸術団体を起用する際、地域の小中学校等の教育機関との協働が発生するなど、地域の文化活動の活性化に貢献できた。</p> <p>③ コロナ禍において業界ガイドライン等に沿いながら様々な対策を施すことにより、安全に大規模なオペラ上演が実現可能であることを、早い時期に全国に先駆けて実証することができた。また、コロナ対策で客席は約50%設定であったが、入場率は94%、アンケート回収率も38.6%に至ったことでわかるように、舞台芸術が社会の中で求められていることを証明した。</p> <p>○ 経済的意義</p> <p>①主に各地域の広報面で、地元の情報通信業、印刷・デザイン業・サービス業への経済波及効果があった。</p> <p>②200名超の出演者・スタッフ、周辺地域からの鑑賞者が移動して滞在することから、運輸・宿泊・飲食・観光業等への経済波及効果があった。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

○ 目標1：単独では実現不可能な規模及び国際的水準の上質なオペラ公演の創造発信

各地域の拠点劇場と芸術団体がしっかりと連携したことにより、壮大なスケールのオペラの3都市4公演が実現しました。観客の満足度は80.6%で目標値を達成することができました。特に今回のプロダクションでは、コロナ禍の下で万全な感染防止策をとることと、新演出オペラの創造性とを両立させる必要があり、演出・振付の大島早紀子をはじめ、プランナー陣、スタッフ、各劇場・団体が、初期段階から議論と工夫を重ね、各地の上演に至りました。主体性をもった集まりの共同制作だからこそ実現できた成果です。また、専門家からも芸術性、共同制作の取り組みと成果に対して高い評価を得ることができ、(詳細は「創造性」に記述)目標を達成できたと考えます。

○ 目標2：オペラ鑑賞者の裾野拡大

学生券、25歳以下対象チケットや低価格帯の座席を設け若年層の来場を促した結果、若い世代のオペラ鑑賞者の入場率は前回『カルメン』より上回ることが出来ました。ダンス界の第一線で活躍する大島早紀子を演出・振付に迎えたことにより、ダンス界にも広く情報が行き渡り新たな観客の獲得にもつながりました。そのことはオペラ鑑賞者の裾野拡大にも大きく寄与しました。

○ 目標3：オペラへの興味・関心の促進

各劇場のノウハウを共有して、専門家による講座、レクチャーコンサート、映像上映等の関連企画を各地域で開催し、若い世代の鑑賞者から初心者まで、幅広い層に対しオペラへの興味を喚起させる取り組みを行いました。また、各公演地の地元児童合唱団、さらに大分公演では地元演奏家のバンドが参加したことにより、地域のアーティストがプロフェッショナルなオペラ上演に主体的に関わる場面を作ることができました。

○ 目標4：社会への波及効果の創出、話題性の提供

東北から九州まで全国3都市縦断上演されること、最新設備と地域随一の規模を備えた山形県の新劇場の柿落とし公演であること、コロナ禍の下での大規模なオペラ上演再開の嚆矢となったこと、ダンス界の鬼才 大島早紀子による新演出等が話題を呼び、パブリシティの露出件数が3館合わせて91件となり目標値を達成することができました。また、大所帯のプロダクションによる人々が各地に出向き滞在することで周辺地域において経済的な効果を創出することにも繋がりました。

○ 目標5：劇場および芸術団体の専門人材育成、スキルアップ

参画した劇場・芸術団体間での共同作業や人材交流を通じ、公演制作スタッフのスキルアップや人的ネットワークの構築につながりました。※当初予定していたインターンの受け入れは新型コロナウイルス感染拡大防止対策のため中止

○ 目標6：バリアフリー・多言語対応の向上

障害者対応の客席案内係(障害者に対する案内を研修等で習得したスタッフ)の配置、チラシ、ホームページ、字幕、当日プログラム等の2ヶ国語表記など、多様化する現代社会に対応する取り組みを積極的に行いました。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

○ 事業期間

当初、急激に加速した新型コロナウイルス感染症拡大のために、大規模オペラ上演を実現する手法の検証や実験、医師等専門家による助言、議論の時間が必要だったことから、開催決定の判断を最大限まで引き延ばし、例年以上の頻度で参画団体が定期的にオンライン会議で情報共有や意思疎通を図りました。そのため、舞台制作に着手する時期が例年よりも遅れてしまったが、参画団体が一丸となり全国3劇場4公演を予定どおりに実施することができました。

○ 事業費

事業費の当初予算と決算状況については「実績報告書」に報告したとおりです。「助成金交付要望書」でお示した助成対象経費（事業：202,731千円 バリアフリー・多言語対応：2,758千円）のうち助成金要望額としては、当初事業：92,000千円、バリアフリー・多言語対応：2,500千円でしたが、助成金交付決定額は事業：63,633千円、バリアフリー・多言語対応：2,416千円でした。そのため、差額の28,450千円相当の事業支出減が必要になったことに加えて、換気・検温・消毒・PCR検査の実施など大規模な感染症対策費の増、感染予防として販売可能席数を約半分程度にしたことによる入場料収入の減などがあり、改めて参画する劇場・芸術団体間で経費節減を目的とした収支計画の見直しを行うとともに、情報や工夫を出し合い協力することで収支バランスの実現を図りました。

そもそも大規模オペラの全国上演には多数の出演者のほか、長期の拘束を要する稽古期間、大きな舞台装置、多数の衣装・小道具、多人数の舞台運行スタッフが必要となり、舞台費、人件費、旅費が大きな割合を占めることとなります。今回は参画6団体の連携・努力と舞台スタッフの協力のもと、早期の手配による旅費の節約など事業費の節減に努めました。また、神奈川、大分、山形の3劇場で広報業務をなるべく共通化して展開したことにより、効率的に各地域での広報宣伝を図ることができ、相当に広報費を抑えることができました。さらに、舞台上の密を避けるための合唱の人数減、海外アーティストが来日できなかったことによる経費の減など副次的な経費の削減もありました。

他方、コロナ禍での初の本格的なオペラ上演となったことと、ダンス界の鬼才 大島早紀子による新演出が話題となったことなどで、3劇場4公演すべてが完売となり、感染症対策による客席収容率50%ながらも最大の入場料収入を得ることができました。

これらのことから、積極的な経費削減努力と地域に観賞機会を提供することとの両立を図ることができ、助成金投入の効果も大きく広げることができたと考えます。

(4) 創造性

自己評価

我が国の実演芸術水準を向上する牽引力となることが期待できる国際的水準の公演であった（と認められる）か。

○ 各劇場・芸術団体の役割

以下のような、各々の専門性やそれぞれの地域特性、ノウハウを投入することにより、国際的水準のオペラ公演となるように努めました。

- ・ 神奈川県民ホール：20年以上の長期間に渡り、オペラの自主制作や共同制作に取り組みノウハウを蓄積してきました。本事業でも共同制作代表館を務め、各団体との連携体制をリードしました。（詳細は「妥当性」に記述）
- ・ iichiko 総合文化センター：九州内では数少ない三面舞台を装備し、オペラの大規模公演が実施できる劇場として、自主制作や共同制作に取り組んできました。特に、平成26年度より文化庁の共同制作オペラ事業に参画し、高い芸術性の作品の上演を続けることで、大分県民及び九州内でオペラへの関心を集めてきたところです。さらにコロナ禍以降では、九州内でいち早く感染症対策を講じた公演を開催し、新しい生活スタイルに合わせた鑑賞スタイルを提供しており、今回もそのノウハウを活かした感染症対策を講じることができました。
- ・ やまぎん県民ホール：大型オペラを上演できる充実した機構を備える東北随一の規模の劇場として開館しました。これまでオペラ上演の機会が少なかった東北地方で、今回世界的水準の公演を実現できました。海外渡航制限による指揮者変更に伴い、山形公演には地元の山形交響楽団常任指揮者の阪哲朗が登場。山形交響楽団の運営団体がホールの指定管理者構成団体であるというアドバンテージを活かし、ホールと山形交響楽団が密接な連携をとって準備を行ったことで、指揮者変更後の短期間の準備ながら高水準の演奏を実現できました。
- ・ 東京二期会：日本最大のオペラ団体。ネットワークや制作スキルを駆使して公演制作、稽古場管理、共同主催者へのキャスティングの助言、プランナーやアーティストとの調整等の役割を果たしました。
- ・ 神奈川フィルハーモニー管弦楽団／山形交響楽団：いずれも日本を代表する楽団として著名な指揮者との共演実績や海外公演の実績を活かし、本事業でも高水準の演奏を実現しました。

○ 新たな創造活動、キーパーソンの水準

コロナ禍で大規模なオペラ『トゥーランドット』を上演するにあたり、厳重な感染防止策をとることと、新演出オペラの創造性との両立が必要ということ、演出・振付の大島早紀子をはじめ、プランナー陣、スタッフ、各劇場が共有し、議論を重ねた結果、以下の内容が実現しました。

- ・ 舞台製作に際しては、現代社会への鋭い視点や卓越した空間構成、美しく壮大な演出・振付で世界的に評価の高い大島早紀子をはじめ、第一線で活躍するプランナー陣を集結させ、総合芸術であるオペラの醍醐味を伝える舞台の創造に挑みました。コロナ感染拡大防止として、舞台上の人員配置や演技の工夫、密を避けた稽古スケジュール、舞台導線の切り分けなど、様々な施策をアーティスト、クリエイターと共有して制作しました。
- ・ コロナ禍で来日不可能となった外国人指揮者に代わり、佐藤正浩（神奈川・大分）と阪哲朗（山形）が指揮を務めました。壮大な物語に寄り添う佐藤の熟練の指揮と、地元オーケストラのポテンシャルを引き出し会場を温かく包んだ阪の指揮で、舞台を支えました。
- ・ 国内外において活躍する白河直子をはじめとするH・アール・カオスによるダンスも、欠くことのできない重要な要素となった総合芸術としてのオペラ上演を高水準で実現し、多様なジャンルのアーティストが舞台芸術を通じて協働し交流する貴重な機会が実現しました。
- ・ 児童合唱として、各地域の小中学校の児童生徒等が参加。プロによる歌唱・演技の指導を受け、さらに一緒に舞台上がることで、人材育成の観点からも、地元参加の観点からも、効果的な施策になりました。

○ 公演の特徴、工夫点、戦略等は事業概要に記述した通り。

(4) 創造性

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながった（と認められる）か。

下記のとおり本事業の芸術性の高さや共同制作の取組み、各地の盛況具合、来場者、参加者の満足度の高さが注目を集めており、各劇場・芸術団体の評価の向上につながったと認められる。

○ マスメディアへの露出

・東条碩夫（音楽評論家、ブログ「東条碩夫のコンサート日記」2020.10.18より）「注目対象の一つは、コンテンポラリー・ダンスの大島早紀子が10年ぶりに手がけた演出と振付にある。ダンスはもちろん、彼女の主宰するH・アール・カオス（白河直子他）。結論から先に言えば、このプロダクションにおけるダンスの使い方は、東京二期会の以前の上演「ファウストの劫罰」（2010年7月15日他）でのそれを上回り、「ダフネ」（2007年）に並ぶ成功だと思われる。合唱の個所では全てダンスが活用され、登場人物の心理の動きなどをイメージする活気ある舞台が繰り広げられる。トゥーランドットの凶暴な心理が動揺する場面になると、高く低く宙を舞うダンスがいつそう激しさを加える。彼女の演技にも、また群衆の一部の動きにも舞踊的な要素が応用されているのも面白いだろう。」

・加藤浩子（音楽評論家、ブログ「加藤浩子のLa bella vita（美しき人生）」2020.10.20より）「音楽への理解がなみならないことが感じられました。聴かせどころのアリアでは、ダンスを引っ込め、歌手に任せる。音楽、作品への愛と理解があります。そして、大島演出でなければ体験できない、ダンスと音楽の一体化。ダンスが作品を掘り下げ、作品の魅力と大島ワールドが合体し、化学反応を起こして、魅力的な「大島トゥーランドット」を創造していました。」

・室田尚子（音楽評論家、note 2020.10.18より）「『オペラは総合芸術である』というとき、それは第一に音楽、美術、言葉、そして舞踊が互いに有機的に結びつきひとつの世界を創り上げていること、そして第二に音楽がドラマを表現しているということを示している。それを忘れたプロダクションは、「オペラ」の名に値しないと私は思う。この『トゥーランドット』は、大島早紀子の演出と佐藤正浩の指揮をはじめ、二村周作の装置、朝月新次郎の衣裳も含めたクリエイター陣のクオリティによって、まさに望むべき「オペラ」だったということができるだろう。」

○ Twitterでの観客の反応より

・神奈川「冒頭の神奈川フィルの響きに痺れた。（略）広い劇場空間を上手に使った美術（装置・衣装・照明）。何よりドラマに説得力を持たせた演出が凄い。」（2020.10.19_6:39）

・大分「古代中国の物語でありながら、どこかダークファンタジーを思わせる舞台空間がとても印象的だった。」（2020.10.24_20:43）

・山形「人生初めてのオペラ『トゥーランドット』を観てきました。歌も凄いけど、ダンサーの方も凄かった。あっという間の三幕でした。山響さんの演奏にも圧倒されて最後はぴえん。こんな凄い山形で観れることに感謝」（2020.10.31_19:29）

○ 専門誌等での評価

・音楽現代 12月号「コロナ禍で困難を強いられたオペラ公演がほぼ従来どおりの舞台展開。意義は大きい。ダンスが持ち味の大島早紀子の演出・振付が注目。音楽の観念性とダンスの視覚性が競合することの多いなか、今回譜面との符合が行き届き、違和感がない。」

・ダンスマガジン 1月号「イタリアオペラの頂点を極めるプッチーニ最晩年の傑作（未完の遺作である）に挑むのは相当の覚悟がいる。しかもコロナ禍のもとで、さまざまな制約がある。誕生したのは「三密」を周到に避けながらも、そんなものは最初からなかったかのようなスケール感と起伏に満ちた、文字通りのグランドオペラであった。（中略）とりわけ指揮者の佐藤正浩が、抑えるところは抑えつつ、大ホールに満ちる音を存分に引き出しながら壮大な音楽のドラマを作っていた。」

・音楽の友 1月号「演奏は、ネチネチしない速めのテンポで全体のストーリーを重視した阪哲朗の指揮が見事だった。（中略）山形交響楽団も複雑なプッチーニのスコアを最良の形で我々に示してくれた。」